

書評

渋沢栄一著、守屋淳訳『現代語訳 論語と算盤』 （ちくま新書）

渡邊潤爾*

Junji WATANABE

西洋世界で最初に活字印刷された書物は『聖書』だが、日本でのそれは『論語』である。『論語』はよく知られているように古代中国の思想家、孔子の語録集を弟子がまとめたものだが、本書は幕末から昭和初期まで生きた渋沢栄一が「論語で人格を磨くこと」と「資本主義で利益を追求すること」の両立を説いた教育論である。原文は文語文だが、現代文に訳されて読み易くなった。

「金銭は卑しい」とする感覚は洋の東西を問わず存在し、金銭が人を狂わせることも事実である。しかし人間は霞を食べて生きていけないものではなく、天から財物が降ってくるわけでもないから、生活のために富を築く営みは不可欠である。ここである経済学者が言ったという格言「道徳なき経済は犯罪であり、経済なき道徳は寝言である」が思い出される。渋沢は「論語」を人格の磨き方や人との付き合い方を学ぶもので、「算盤」とは技術を学び、仕事をして価値を生み出し、国を豊かにすることだとしている。論語から倫理を学ぶことで、資本主義の利益主義一辺倒から離れ、バランスのとれた人格が形成できるとしている。

渋沢は官僚から経済界に転身する際に同僚から「金銭に目がくらん」と批判され、それに対する反論の中で『論語』を持ち出したという。「論語と算盤」という組み合わせは、儒学が主要な学問だった江戸期から、利益第一主義が横行した明治初期への激変が背景にある。江戸期では武士層が学んだ儒教道徳と、商人層の経済活動が全く切り離された状態にあり、経済力を欠いた武士層がしばしば商人から賄賂を受取る一方で、商人は短期的利益を追求する余り外国人貿易商から「約束を守らない」と酷評されるほどだった。さらに明治に入ると儒学が排斥され、西洋の実用的学問がもてはやされる中で、道徳の欠如が目に見えるものとなった。渋沢がこうした世相に危機感を持ったことで本書が生まれた。

『論語』を残した孔子は理屈一辺倒の道徳家に思われがちだが、政治家として国の運営を行ったので経済をおろそかにしたわけではない。孔子の弟子にも子貢という経済感覚に優れた商人がおり、その経済力で師と一門を支え、後に呉越の戦いで外交交渉にも手腕を発揮した。孔子らの現実の在り方から、倫理を実践する背景に経済があるという渋沢の洞察は非凡なものがある。彼

* 東海学園大学経営学部経営学科

自身も経済界で富を築きながら、『論語』にある道徳や公益性を追求する生涯を全うした。「日本資本主義の父」と呼ばれたように、起業家として470社以上の会社の設立に関わり、その中にはみずほ銀行、東京海上、帝国ホテルといった名だたる企業が並んでいる。このように多くの起業を行いながら、子孫には美田を残さない生き方は見事としか言いようがない。さらに教育や福祉など社会事業を「公益」として行ったので、『論語と算盤』には実践の重み加わる。

渋沢は『論語』を題材にした理由として、日本で道徳の基本として定着しており、多くの格言の出典でもあることも挙げている。例えば「温故知新」の元は「故きを温（たず）ねて、新しきを知る、以って師と為るべし」である。「切磋琢磨」は、他人としのぎを削って競うというのが一般的な解釈になっているが、「自らの心を磨く」というのが元来の意味であり、原典を読んで蒙がひらかれた。かつては論語の章句を漢文訓読で暗唱するという教育があったが、私の親世代以降、私も含めてそのような教育を受けていない。そうした中で十年ほど前に斎藤孝著『声に出して読みたい論語』がヒットし、論語の章句を原文で読むという教育法が見直されている。私もいくつかの章句を読んで精神が引き締まるような感覚を覚えたので、大学の演習において学生に読ませてみた。どれほど実効性があるか不明だが、多少なりとも精神に益することはあろう。

哲学により倫理道徳を研磨するというのが多くの社会で見られたが、論語はこうした目的を備えたコンパクトな原典として時代を超えて読まれる書となっている。明治期でも夏目漱石や武者小路実篤らが『論語』を熱心に学び、昨今の有名人でも論語を座右の書とする人が見受けられる。渋沢を入り口として『論語』を学ぶことで得られるものは多い。

本書は教条的な道徳書というわけではなく、松平定信など偉人の人生を題材とするなどリアルな教訓を駆使して興味を引き付ける。また西郷隆盛との思い出が語られているのは幕末から明治のリアルタイムを生き抜いた渋沢ならではのことであろう。

中国でも本書が広く研究され、日本でも十年ほど前のリーマンショックからビジネス書としてブームに乗り始めたが、それにとどまらず倫理学習の書として定着することが望ましい。岸田政権の下で「成長と分配」が議論され始めている中で、いま一度読み直してみたい。